

プレスリリース

2017年 9月 12日

国立大学法人東京大学大学院工学系研究科

学校法人千葉工業大学

国立大学法人高知大学

国立研究開発法人海洋研究開発機構

過去の「超温暖化」を終息させたメカニズムの痕跡を インド洋の深海堆積物から発見

東京大学大学院工学系研究科の安川和孝助教、加藤泰浩教授、中村謙太郎准教授、千葉工業大学次世代海洋資源研究センターの藤永公一郎上席研究員と高知大学海洋コア総合研究センターの池原実教授の研究グループは、前期始新世にあたる約5,600～5,200万年前に繰り返し発生した急激かつ短期的な地球温暖化イベントの詳細な記録を、世界で初めてインド洋の深海堆積物から復元しました。さらに、それらの化学組成データを統計的に解析し、当時の堆積物を構成する複数の独立な成分を分離・抽出しました。その結果、前期始新世の複数の温暖化イベントにおいて、海洋表層の生物生産が増大して大気-海洋系から余剰な二酸化炭素を除去する「地球システムの負のフィードバック」と呼ばれるメカニズムが機能し、温暖化を終息させていたことが明らかとなりました。本研究の成果は、人類活動により放出された大量の温室効果ガスがグローバルな環境や物質循環にどのような影響を与え、どのようにして元の状態へ回復していくのかを、数万年以上の長期スケールで予測する上で重要な知見となります。

詳細は[東京大学のサイト](#)をご覧ください。

国立研究開発法人海洋研究開発機構

広報部 報道課長 野口 剛